

タイトル:愛を育む二人の修行～花の妖精リアと治癒師オークの恋物語～

キャッチコピー:体格差は問題じゃない！不可能を可能にする愛を育む修行とは？

あらすじ:花の妖精リアは、オークの治癒師ゼンクに恋をしている。しかし二人の間には圧倒的な体格差があった。リアの熱烈なアプローチにもかかわらず、ゼンクは現実的な問題を懸念し、その想いに応えられずにいた。

諦めきれないリアは、かつて人間と恋をした老妖精フランドールのもとへ旅立つ。そこで彼女は、異種族間の恋を成就させるための特訓を受けるのであった。

\*\*\*

「ゼンクのバカ！わからず屋、この朴念仁一！！」

朝の静けさを破るリアの声が響き渡った。自称・治癒院の看板娘であり、花の妖精である彼女は、その小さな体からは想像もできないほどの迫力ある声で怒りを露わにしたのだ。近所の人々は慣れっこで、「またか」とため息をつくばかりだった。

「おいリア、朝っぱらから大声出して、近所迷惑だぞ」

対する男はオークのゼンク。冒険者として汗水流して資金を貯め、若くして治癒師の資格を取得し、治癒院を開業した有望な若手だ。彼の腕前は群を抜いて素晴らしかったが、いかつい顔立ちがネックで、人柄を知る近所の人や冒険者時代の友人以外には患者が集まらないのが悩みだった。そのため、彼はご近所の目というものを気にしている。

「だって私こんなにかわいいのよ！？こんなに可愛い私に愛されているのにふるなんて、バカかわからず屋か朴念仁じゃない！！」

暴論ではあったが、リアの主張は一部において真であった。甘い香りが漂うオレンジ色のふわふわな髪、花蜜を思わせる黄色い瞳、尖った妖精らしい小さな耳、よく囁くピンク色の唇は確かに愛らしかった。

ゼンクは深いため息をつき、額に手を当てた。その大きな手は、濃い緑色の肌にも覆われていた。オークらしい筋骨隆々とした体つきは、一見すると知的な装いとは不釣り合いに見えた。特に目立つのは、鼻梁にかかった眼鏡だ。オークにはあまりにも似合わないその姿は、冒険者時代に暗がりランプを頼りに勉強を重ねた日々の名残だった。

その独特な雰囲気や漂わせるゼンクと、愛らしさを全身から発するリア。二人の組み合わせは一見すると奇妙に映るかもしれないが、冒険者時代から息の合った名物コンビとして知られていた。巨大なオークの肩に乗った小さな妖精という姿は、冒険者ギルドでも一目置かれる存在だった。ゼンクの力強さとリアの機転の良さが絶妙に調和し、難しい依頼も次々とこなしていったのだ。

しかし、この瞬間のゼンクの表情には、困惑の色が浮かんでいた。彼は眼鏡を押し上げながら、優しくも諭すような口調でリアに語りかけた。

「それはそうだが...お前、妖精だろ。俺との体格差、どれだけあると思ってるんだ」

ゼンクは典型的なオークの体格を誇っていた。身長220センチの巨躯は、どっしりとした筋肉に覆われ、その存在感は圧倒的だった。太い腕は樫の木の幹のよう、胸板は分厚い鎧のよう。首回りは逞しく、顎は角張っていた。大きな手のひらは、リアの体全体を軽々と包み込めそうだった。

一方、リアは花の妖精らしい愛らしさを湛えていた。身長はわずか40センチ。ゼンクの膝頭にも届かないほどの小柄な体つきだ。蝶の羽のような薄い羽が背中に生え、風に乗ればふわりと舞い上がりそうな軽やかさ。細い腕や脚は華奢で、指先は花びらのように繊細だった。

まるで巨人と小人のような対比が、二人の間に存在していた。つまりゼンクの言い分は正論である。しかし、恋する乙女の前に正論は通じない。

「でもでも、だって……！ゼンクは私の運命の人なんだもん！」

リアの心の中で、過去の記憶が鮮明によみがえった。あの日、彼女は絶望の淵に立たされていた。希少な鱗粉を持つ花の妖精として、密売人たちに捕らえられ、闇市場で売り飛ばされようとしていたのだ。小さな体を縛られ、暗い箱の中に閉じ込められた彼女は、もう二度と自由の身にはなれないと諦めかけていた。

そんな時、突然響き渡った怒号と共に、箱が開かれた。目の前に現れたのは、巨大なオークの姿だった。恐ろしげな顔つきとは裏腹に、その目には優しさが宿っていた。

「大丈夫か？怖がらなくていい。もう安全だ」

その低い声に、リアは不思議と安心感を覚えた。ゼンクは彼女を優しく抱き上げ、密売人たちから救出したのだ。その時の彼の勇敢さと優しさは、リアの心に深く刻まれた。自由を取り戻した喜びと、救い主への感謝の気持ちが、やがて恋心へと変わっていったのだった。

これらの記憶が、リアの決意をさらに強くした。体格差など関係ない。彼女の愛は、そんな障害など簡単に乗り越えられるはずだった。リアは両手を腰に当て、ゼンクを睨み上げた。

「体格差なんて交配できないってだけじゃない！そんなの大した…っヤダ！私もゼンクとらぶらぶ交配したい！おしべとめしべでいちゃいちゃしたいの！」

「どっちなんだよ……」

ゼンクは呆れながらも、その表情にはリアへの情が垣間見えた。厳つい顔に浮かんだ戸惑いの表情は、普段の無愛想さとは対照的に、彼の内なる優しさを垣間見せていた。思わず大きな手を伸ばしかけたが、途中で止まる。中途半端な慰めはかえってリアを傷つけると悟ったのだ。その仕草には、リアへの思いやりと、状況の難しさへの葛藤が滲んでいた。

途方に暮れるゼンクを前に、リアは突然、目を輝かせた。その小さな顔に、希望の光が差し込んだようだった。

「そうだわ！ゼンク、私にいい考えがあるの！」

ゼンクは眉をひそめ、不安そうな表情を浮かべた。リアのアイデアは往々にして突飛なものが多かったからだ。

「私の故郷、妖精の国に行くの！そこには昔、人間と番った老妖精がいたのよ。きっと彼女なら、私たちの悩みを解決してくれるはず！」

リアは興奮気味に話し続けた。その声には決意が滲んでいた。

「彼女に師事すれば、きっと素晴らしいアドバイスがもらえるわ。種族間の恋愛を乗り越える方法とか、体格差を克服する秘訣とか…」

ゼンクは深いため息をつきながらも、リアの熱意に少し心を動かされた様子だった。

「お前、本気でそんなことを……」

リアの決意は固かった。彼女は小さな拳を握りしめ、ゼンクを見上げた。

「私は諦めないわ。この恋、絶対に実らせてみせる！老妖精様のところまで行って、必ず方法を見つけてくるわ！」

その瞳には、決して覆そうにない熱意があった。ゼンクは言葉を失い、ただリアの決意に満ちた姿を見つめるしかなかった。かくして、リアは妖精の国へと旅立った。そして老妖精のもとで、異種族との恋の成就法について師事を受けることになったのである。

嵐のようにリアが去った後、彼女がいなくなった治癒院は静けさに包まれた。ゼンクは深い溜息をつきながら、自分の大きな手をじっと見つめた。「俺も、何かできることがあるはずだ」と呟くと、彼は密かに古い魔法の書物を探しはじめたのであった。

妖精の国の奥深くにある古木の洞で、老妖精フランドールは静かに目を閉じていた。突如、小さな妖精が風のように飛び込んでくる音に、彼女はゆっくりと瞼を開いた。

「突然、冒険に出ると言って飛び出した小娘が訪ねてきたと思ったら、またまた突飛なことを言い出すのね」

フランドールの声は、幾多の季節を越えてきた古樹のように深く落ち着いていたが、その瞳には若々しい輝きがあった。銀色に輝く長い髪は、まるで月光を織り込んだかのように美しく、頭上で優雅な鬘を作っていた。

リアは息を切らせながら、急いで説明を始めた。

「フランドール様！私、ゼンクというオークに恋に落ちたんです。でも、いくら愛を告げても、ゼンクは格差があるからって……」

リアの大きな瞳には涙が溜まり、まるで朝露に濡れた花のようだった。フランドールは静かにリアを見つめ、その翠緑の瞳に思慮深い光が宿った。

「あらあら、まあまあ」

フランドールは優しく微笑んだ。

「確かに、私も昔はあなたと似たような悩みを抱えていたわ」

「どうすれば体格差を克服できるんでしょうか？魔法か何かで体を大きくする方法はないんですか？」

フランドールは軽くため息をつき、かすかに光る模様の浮かぶ手をリアの頭に優しく置いた。

「ところでリア、あなたはゼンクさんの気持ちを本当に考えたことがあるの？」

この質問に、リアは一瞬言葉を失った。

「ゼンクの……気持ち？」

フランドールは続けた。

「愛するということは、相手の気持ちも大切にすること。あなたの気持ちも大切だけど、ゼンクさんの気持ちも同じくらい大切なのよ」

リアは少し考え込む様子を見せた。

「私……ゼンクの気持ちを考えたことがなかったかも……」

「そうね。まずは、お互いの気持ちを理解し合うことから始めましょう。体の問題は、その後で考えればいいの」

リアの表情が少し曇った。

「でも、体格差がなければ……」

フランドールは静かに首を横に振った。

「体を変えることよりも、心を育てることの方が大切よ。真の愛と理解を育むための知恵を授けましょう。それでもいい？」

リアは少し戸惑いながらも、ゆっくりと頷いた。

「はい……わかりました、フランドール様」

こうして、リアの異種族間恋愛の特訓は、予想外の方向へと進み始めた。それは単なる体術や魔法の訓練ではなく、心の成長を促す旅の始まりだった。

フランドールは静かにリアを見つめ、三つの重要な教えを伝え始めた。

#### 1. 相手の気持ちを考えましょう

「リア、まず大切なのは相手の気持ちを考えること」

フランドールは優しく語りかけた。

「あなたはゼンクさんの気持ちを本当に理解しようとしていたかしら？」

リアは目を閉じ、深く考え込んだ。

「私……ゼンクの気持ちを考えずに、自分の思いばかり押し付けていたわ」

フランドールは頷いた。

「そう、気づけたのね。これからは、相手の立場に立って考えてみるのが大切よ」

## 2. 与えられるより与えなさい

「次に、愛とは与えるものだということを覚えておきなさい」

フランドールは続けた。リアは少し困惑した表情を浮かべた。

「でも、私はゼンクに愛を与えようとしていたはず……」

フランドールは微笑んだ。

「本当にそうかしら？あなたは自分の欲求を満たすことばかり考えていなかった？」

リアは顔を赤らめた。

「確かに……自分が幸せになりたいという気持ちが強すぎたかも」

「相手の幸せを第一に考えること。それが真の愛よ」

フランドールは諭すように言った。

## 3. 自分の行動に責任を持つこと

「最後に、自分の行動に責任を持つことを忘れないで」

フランドールは真剣な表情で言った。リアは首を傾げた。

「責任……？」

「そう、あなたの行動はあなたの意思で選んだもの。その結果も受け入れなければならないわ」

リアは深く考え込んだ。しばらくの沈黙の後、彼女の目が大きく見開かれた。

「私の行動で、ゼンクや周りの人たちを困らせていたわ……」

リアは小さな声で呟いた。

「そうか、これは全て私の責任なんだ」

フランドールは静かに頷いた。

「そうね。その気づきは大切よ」

リアはさらに考え込む様子を見せた。突然、彼女の表情が変わり、決意に満ちた目でフランドールを見上げた。

「フランドール様、私、わかりました」

リアは力強く言った。

「ゼンクに謝らなければいけない。私の思いばかりを押し付けて、ゼンクの気持ちを考えていなかった。それが全ての問題の原因だったんです」

フランドールは優しく微笑んだ。

「その通りよ、リア。自分で気づくことができ、本当に素晴らしいわ」

リアは小さな拳を握りしめた。

「ゼンクのところに戻ったら、まず謝罪します。『思いを押し付けてごめんなさい』って。そして、これからは互いの気持ちを尊重し合える関係を築いていきたいって伝えます」

フランドールは静かに頷いたが、その目には深い思慮の色が宿っていた。

「そうね、その決意は素晴らしいわ。でも、リア、もう一つ大切なことがあるのよ」

リアは真剣な眼差しでフランドールを見つめた。

「はい、何でしょうか？」

「仮に、ゼンクがあなたの謝罪を受け入れてくれなかったとしても、それもまたあなたの行動がもたらした結果の一つだということを理解しなさい」

リアの表情が一瞬曇った。

「でも、私は心から謝るつもりです...」

フランドールは優しく微笑んだ。

「そうね。でも、相手の気持ちを尊重するということは、相手の決定も受け入れるということよ。もし謝罪が受け入れられなかったら、その時は素直に身を引くことも大切な責任の取り方なの」

リアは深く考え込んだ後、ゆっくりと頷いた。

「わかりました。確かに、これまでの私の行動が招いた結果かもしれません。ゼンクの気持ちを本当に尊重するなら、どんな結果でも受け入れなければいけないんですね」

「その通りよ」

フランドールは満足そうに言った。

「謝罪は新しい始まりになるかもしれないし、または一つの区切りになるかもしれない。どちらにしても、あなたの成長につながるはずよ」

「ありがとうございます、フランドール様」リアは感謝の気持ちを込めて言った。「この学びを胸に刻んで、どんな結果になっても、自分の行動に責任を持ち、ゼンクの気持ちを尊重します」

フランドールは温かな笑顔を向けた。

「あなたの成長が本当に嬉しいわ、リア。これからのあなたの人生が、より豊かで深いものになることを願っているわ」

こうして、リアの心には、真の愛と理解を育むための大切な教えが深く刻まれた。そして何より、自分の行動に対する責任と、相手の気持ちを真に尊重することの意味を、彼女は深く理解したのだった。

リアが妖精の国へ旅立って数日が過ぎた。治癒院は静けさに包まれ、ゼンクは日々の診療に励んでいた。しかし、彼の心の中には何か物足りなさが漂っていた。

ある日、年老いた患者のヒューマンのマーサが診療にやってきた。彼女は関節の痛みを訴えていたが、ゼンクの表情を見てふと立ち止まった。

「先生、何か悩み事でもあるのかい？」

マーサは優しく尋ねた。ゼンクは一瞬戸惑ったが、やがてため息をついた。

「いや……ただ、少し考え事をしていただけです」

マーサは微笑んだ。

「あの可愛らしい妖精さんのことかい？最近見かけないと思っていたんだよ」

ゼンクは驚いて顔を上げた。

「リアのことですか？」

「そうそう、リアちゃん」

マーサは頷いた。

「あの子がいると、ここがもっと明るくなるんだよ。患者たちも、あの子の笑顔を見るのを楽しみにしているんだ」

ゼンクは黙って聞いていた。マーサの言葉が、彼の心に響いていく。

「先生、許してくれるなら言わせてもらおうけど」

マーサは慈愛に満ちた目でゼンクを見つめた。

「あの子は先生のことをとても大切に思っているよ。そして、先生もあの子のことを…」

ゼンクは言葉を遮るように咳払いをした。しかし、その表情には柔らかさが宿っていた。その日の診療を終え、ゼンクは一人で治癒院の庭に立っていた。リアが大切にしていた花々が、静かに風に揺れている。

彼は自分の大きな手のひらを見つめた。その手に、リアの小さな体を抱きしめた感触が蘇る。

「俺は……リアのことを……」

ゼンクは自分の気持ちと向き合い始めていた。リアがいない日々を過ごす中で、彼女の存在が  
いかに大きかったか、そしていかに大切だったかを、彼は痛感していた。

「俺も変わらなきゃな」

ゼンクは静かに呟いた。

「リアが戻ってきたら、ちゃんと気持ちを伝えよう」

夕焼けの空が燃えるように赤く染まり、その光が治癒院の窓から差し込んでいた。ゼンクは、そ  
の温かな光に包まれながら、静かに立ち尽くしていた。彼の大きな手には、古書店から苦労して  
入手した珍しい魔導書が握られていた。

フランドールは静かに目を閉じていた。その瞼の裏では、妖精眼と呼ばれる特殊な能力により、  
遠く離れた治癒院の様子が映し出されていた。フランドールの口元に、優しい微笑みが浮かぶ。

(あらあら、リアにはああいったけど、まったく脈がないワケでもなさそうね)

フランドールは静かに目を開けた。妖精眼で遠くを見ていた彼女の瞳が、ゆっくりと現実の世界  
に焦点を戻す。目の前に置かれた蜂蜜茶の香りが、古木の洞窟に漂っていた。老妖精は優雅に  
蜂蜜茶を手に取り、小さく一口啜った。その温かさが体に広がるのを感じながら、彼女は近くで蜂  
蜜茶のカップを手を持ちながら、内省に耽っているリアに目を向けた。

「リア、ちょっといいかしら」

リアは静かに顔を上げ、フランドールを見つめた。その瞳には、これまでの思索で得た何か  
が宿っているようだった。フランドールは微笑みながら続けた。

「あなたの素直に反省できる場所、素敵だと思うわ。それはあなたの持つ素晴らしい資質」  
「フランドール様、ありがとうございます。でも私、すぐにゼンクのところへ戻って謝らなければ  
……」

しかし、フランドールは穏やかな笑みを浮かべながら、リアの肩に優しく手を置いた。

「ちょっと待ちなさい、リア。ゼンクに謝罪するのは大切だけど、まだやるべきことがあるわ」

リアは驚いた表情でフランドールを見つめた。

「え？でも……」

「それはそうとして、ついでなんだから肉体の方のレッスンもしていきなさい」

「でも、フランドール様……」

リアは躊躇いながらも、その言葉に耳を傾けた。

「ここからが本当の挑戦の始まりなの」



フランドールは静かに言った。

「精神的な訓練の次は、肉体的な訓練よ。あなたとゼンクさんの間には、まだ大きな体格差があるわ。その差を少しでも埋めるための訓練が必要なのだ」

リアの目が大きく見開かれた。

「肉体的な……訓練？」

「ええ」

フランドールは少し含み笑いをしながら続けた。

「ゼンクさんとの幸せな未来のために、心も体も鍛えていきましょう」

リアは一瞬迷いの表情を見せたが、やがてゆっくりと頷いた。

「わかりました……フランドール様。ゼンクのためにも、もう少し頑張ります」

フランドールは満足そうに微笑んだ。

「その意気よ。さあ、新たな挑戦の始まりよ」

こうして、リアの異種族間恋愛特訓は、新たな段階へと突入していった。彼女の心には、ゼンクへの深い愛と、自己成長への強い決意が燃えていた。

レッスン1: 戦に勝つには敵を知れ

「さて、リア。愛する人を理解することは大切です。ゼンクさんの…そうですね、『おしべ』の大きさについて話しましょうか。」

こほん。ひとつ咳払いをして、フランドールは、空中に手をかざすと、輝く妖精の鱗粉で果物と花の絵を描いた。

「ゼンクさんはオーク、彼の『おしべ』は、私たちの基準では…そうですね、永遠の若さを与えると  
いう伝説の竜果実ほどの太さがあるでしょうね。長さは、妖精の森の奥深くに一夜だけ咲くという  
月虹の蘭の茎ほど」

リアは目を丸くして聞いていた。フランドールは続けた。妖精ではない現代人読者諸氏に伝わるように伝えると――ヒューマンの女性の細腕位とでも評そう。

老妖精は、リアの反応を見ながら、さらに柔らかく付け加えた。

「私たち妖精にとっては、まるで大木のようなものですね。でも、愛とは形だけではありません。心と心の繋がりこそが大切なのです」

リアは、驚きと期待が入り混じった表情で頷いた。フランドールの言葉は、彼女の中に新たな視点と、乗り越えるべき課題の大きさを植え付けたようだった。

## レッスン2: 何はなくとも体力及び耐久力をあげよ

フランドールは真剣な表情でリアを見つめ、次のレッスンを始めた。

「さて、リア。異種族との愛には、並の妖精の体力では足りないの。体にかかる負荷も大きいわ。だから、基礎体力と耐久力を上げる訓練をしましょう」

まず、基礎体カトレーニングから始まった。フランドールは妖精サイズの小さな障害物コースを作り出した。リアは花びらの上を軽やかにジャンプし、蜘蛛の糸を伝って登り、露の玉をくぐり抜けた。最初は息を切らしていたが、日を追うごとに動きが滑らかになっていった。

次に、魔法での耐久力強化。フランドールは微弱な風の魔法をリアに向けて放った。

「この風に耐えるのよ。徐々に強くしていくわ。」

リアは必死に踏ん張り、風に飛ばされまいと全身に力を込めた。最初は数秒で吹き飛ばされていたが、練習を重ねるうちに、強い風の中でも立っていられるようになった。

さらに、花の蜜を集めて特殊な強化ポーションを作る練習も行った。リアは様々な花から蜜を集め、フランドールの指導の下、それらを調合した。できあがったポーションを飲むと、体が淡く光り、一時的に強くなるのを感じた。

「これで、少しは『おしべ』に耐えられるようになったかしら」

フランドールが言うと、リアは恥ずかしそうに、でも誇らしげに頷いた。訓練は厳しかったが、リアの瞳には決意の光が宿っていた。ゼンクとの愛を実らせるため、彼女は必死に努力を重ねていったのだった。

## レッスン3: めしべの伸縮性を上げよ

このレッスンは比較的性的な倫理観において大らかな妖精族にとっても、非常に恥ずかしい特訓だった為、リアとフランドールの名誉の為、具体的な内容の記載は伏せておくものとする。

こうして、厳しい修行の末、リアはゼンクの『おしべ』に耐えられる肉体と魔法を身に着けた。フランドールは、長い修行を終えたリアを優しく見つめ、最後のアドバイスを贈ることにした。その声は柔らかく、しかし重みがあった。

「リア、よく頑張ったわね。体と魔法の準備はできたようだけど、最後に大切なことを伝えておくわ」

フランドールは深呼吸をして、続けた。

「愛は、体の大きさや種族の違いを超える力を持っているの。でも、それは同時に繊細で、大切に育てていかなければならないものよ。ゼンクさんとの関係を育むときは、焦らずにゆっくりと進めていくことが大切。お互いの気持ちや体の違いを尊重し合いながら、少しずつ近づいていくの」

老妖精の目に、懐かしさと温かさが宿った。

「そして忘れないで。愛は単なる肉体的なものではないわ。心と心の繋がり、お互いを思いやる気持ち、一緒に過ごす時間の中で育つものなの。たとえ体の大きさが違って、心が通じ合えば、きっと幸せな関係を築けるはず」

フランドールは最後に、優しく微笑んだ。

「さあ、行きなさい。あなたの純粋な愛と、ここで学んだことを胸に。ゼンクさんとずっと幸せになると信じているわ。ただし、焦らずに、お互いを大切にね」

リアは感動で目に涙を浮かべながら、深く頭を下げた。彼女の心には、愛する人との幸せな未来への希望が満ちていた。

数日後、リアは妖精の国から戻ってきた。フランドールの厳しい訓練を経て、彼女は心身ともに成長していた。その瞳に宿る光は、ゼンクへの深い愛情と新たな決意を物語っていた。

治癒院に到着したリアは、ゼンクが患者を診ている姿を見つけた。以前なら直ぐに飛び込んでいったことだろう。しかし今回は、診療が終わるのを静かに待った。

最後の患者が去り、ゼンクがほっと息をついた瞬間、リアはそっと近づいた。

「ゼンク……」

リアの声は、いつもの元気さとは違い、柔らかく震えていた。驚いた表情でリアを見つめるゼンク。

「リア……戻ってきたのか」

リアは深呼吸をし、真摯な眼差しでゼンクを見上げた。

「ゼンク、まず謝らせて。今まで、あなたの気持ちも考えずに、自分の思いばかりを押し付けてごめんなさい」

ゼンクの目が大きく見開かれた。一瞬の沈黙の後、彼の表情が柔らかくなる。

「いや…俺こそ謝らなきゃならない。お前の気持ちから逃げて回ってばかりで…本当に悪かった」

リアの目に涙が浮かんだ。

「ゼンク……」

「俺も、お前がいない間にいろいろ考えたんだ」

ゼンクは続けた。

「お前がどれだけ大切な存在か……そして、俺たちの関係をもっと大切にしなきゃいけないって」

リアは小さく頷いた。

「私も、フランドール様から多くのことを学んだわ。相手の気持ちを考えること、与えることの大切さ……そして、自分の行動に責任を持つこと」

ゼンクは優しく微笑んだ。

「お前、随分成長したんだな」

「うん……でも、まだまだ学ぶことがたくさんあるの」

リアは真摯に答えた。

「これからは、あなたと一緒に成長していけたらいいな……って」

ゼンクは大きな手でリアの頭を優しく撫でた。

「ああ、そうだな。俺たちで、ゆっくりと関係を築いていこう」

リアは少し赤面しながら続けた。

「それでね、私……あなたと一緒にになれるように、交配できるようになったのよ」

ゼンクの目に驚きと感動の色が浮かぶ。

「お前……本当に頑張ってきたんだな」

彼の声は、普段の低い響きとは違い、柔らかく温かみを帯びていた。大きな手がリアを優しく包み込む。その仕草は、世界で最も繊細な花を扱うかのように慎重で、それでいて力強かった。

「俺も……お前のために努力したんだ」

ゼンクは少し照れくさそうに言った。

「その……『おしべ』を小さくする魔法ってやつをな」

リアの目が驚きと喜びで大きく見開かれた。

「ゼンク……あなたも努力してくれたの？」

ゼンクは優しく頷いた。

「ああ。お前が頑張ってるなら、俺だって黙ってられないだろ」

二人の視線が絡み合う。そこには言葉では表現できない深い愛情と相互理解が流れていた。静かな笑いが、二人の間に温かな空気を作り出す。

そのとき、リアとゼンクは気づかなかつたが、治癒院の入り口で小さな物音がした。先ほど診療を終えたばかりの近所のエルフの男性患者が立っていた。彼は忘れ物を取りに戻ってきたのだが、思わぬ光景を目にして固まっていた。

しかし、二人の距離がさらに縮まり、いちゃこらが始まりそうになったのを見て、エルフは慌てた。彼は瞬時に判断し、妖精並みの軽やかな足取りで診察室に忍び込んだ。

息を殺しながら、エルフは自分の忘れ物——治療薬の処方箋を見つけた。それを素早く、かつ静かに掴むと、二人に気づかれないよう慎重に後ずさりした。治癒院を後にしながら、エルフは生温かい笑みを浮かべた。

『俺も、ああいう相手を見つけられたらいいなあ……そうだな、真面目に嫁さん探すか』

エルフは、新たな決意を胸に、夕暮れの街へと歩み出したのだった。